



豊後高田市の魅力と政策紹介

河野 真 一¹⁾

(令和 4 年 12 月 3 日受付, 令和 4 年 12 月 10 日受理)

Introduction of Bungotakada City, the policies and attractions

Shinichi KAWANO¹⁾

1. 豊かな自然と歴史のまち豊後高田市

豊後高田市は、平成 17 年 3 月 31 日に豊後高田市、真玉町、香々地町の 1 市 2 町が合併して生まれた市で、大分県の北東部、国東半島の西側に位置する、人口約 2 万 2 千人の小さな市です。(総面積 206.24 平方キロメートル)

豊かな自然と温暖で過ごしやすい瀬戸内式気候に属し、半島の中心にある両子山から放射状に谷や峰々が延びた地形となっており、河口付近に市街地が形成され、瀬戸内海国立公園及び国東半島県立自然公園を擁し、豊かな自然と歴史文化などの地域資源が豊富なまちです。

国東半島は、全国に四万社あまりある八幡様の総本宮である「宇佐神宮」の領地として平安時代には神仏習合の「六郷満山文化」が隆盛を誇ったことから、山里には多くの神社、仏閣が数多く残っています(図 1)。

代表的なものでは、現存する九州最古の木造建築物で、国宝の「富貴寺大堂」があり、平等院鳳凰堂、中尊寺金色堂と並ぶ日本三大阿弥陀堂の一つと呼ばれています。

その他、国指定の重要文化財で日本最大級の磨崖仏である「熊野磨崖仏」や一か所で 9 つの重要文化財の仏像を有する「真木大堂」があります。

また、六郷満山の僧侶であれば必ず一度は体験しなければならない「峯入り」と呼ばれる風習が残っています。この「峯入り」は、現在では、およそ 10 年おきに開催され、「白装束」を纏った僧侶が国東半島の険しい山々を数日間かけて踏破します。

国東半島は、100 万年以上前に中央にある両子山の火山活動でできた古い半島です。悠久の歴史の中で浸食が進み、険しい岩山が連なる「耶馬」と呼ばれる特徴的な景観が見られることから、「中

¹⁾ 豊後高田市役所. ¹⁾ Bungotakada City Office.

山仙境(夷谷)],と「天念寺耶馬,無動寺耶馬」という2つの絶景スポットが国の名勝に指定されています。その他,景観の国宝といわれる国の重要な文化的景観に指定された「田染荘小崎」,更には,日本夕陽百選と国の登録記念物(景観)に指定された真玉海岸などの景勝地があります(図2)。

豊後高田市は,神仏習合の六郷満山文化,岩山が連なる特徴的な景観,そして,千年以上の歴史を誇り,毎年旧暦の1月7日に僧侶が鬼となり,人々に「無病息災」などの福をもたらす「修正鬼会」など,特徴的な伝統文化,風習などが残ることから,お隣の国東市と一緒に「鬼が仏になった里くにさき」として,「日本遺産」の指定地域でもあります。

豊後高田市の海岸は遠浅で広大な干潟が広がっていたことから,江戸時代より干拓地の造成が行われ,古くから農業が主力産業となっています(図3)。

特に広大な干拓地で栽培される「白ネギ」は,栽培面積約385haと西日本一の産地で,生産額では約35億円と,全国の自治体で第3位(平成30年推計)となっています。

また,米の転作作物としてそばの生産を奨励し,今や西日本有数のそば産地となり,春と秋の年に2回,新そばが食べられる「手打ちそば処」としても人気となっています。

その他,畜産も盛んで,肉用牛肥育頭数が県内一となっており,中でも,米を200kg以上食べさせた「豊後米仕上げ牛」はオレイン酸が豊富で,ふるさと納税で一番人気となっています。また,養鶏(ニワトリ)も多く,首都圏と大阪の駅前などにある居酒屋チェーン「豊後高田どり酒場」で提供される鶏肉は,豊後高田産となっています。



図1 六郷満山文化の文化財・史跡



図2 豊後高田の景勝地



図 3 豊後高田の特産品の例

2. 商業と観光の一体的振興「豊後高田昭和の町」

豊後高田市は、鎌倉時代から戦国時代まで、国東半島地域の武士団の瀬戸内海への根拠地で、江戸時代には、長崎の島原藩の飛び地となり、年貢米の積出しなど、廻船の寄港地として栄え、明治以降は関門地域への内海航路への拠点となるなど歴史的には、西瀬戸地域の交流の結節点の役割を果たしてきました。

地理的に国東半島の西の入口に当たることから、半島の玄関口として古くから国東半島の需要を賄う商業都市として、交通の面では、大正期に開業した旧宇佐参宮鉄道が、宇佐神宮と豊後高田市の中心部を結んでおり、終点である旧豊後高田駅（現バスターミナル）は、半島一円のバス路線の起点として交通結節点であったことから旧駅前から続く市の中心商店街は、必然的に国東半島の人々が集まる商業の中心地となり「おまち」と呼ばれ栄えました。

昭和30年代に、中心市街地は賑わいのピークを迎えましたが、その後、高度経済成長に伴う産業構造の変化による都市部への急激な人口流出、全国的なモーターゼーションの進展に伴う宇佐参宮鉄道の廃線、また、中心商店街にあった金融機関の相次ぐロードサイドへの移転、更にはロードサイド型店舗の進出などにより、中心商店街は、衰退の一途をたどることとなり、時代が昭和から平成に変わる頃は、「犬と猫しか歩かない」と揶揄されるほど、寂れた商店街となっていました。

この時代から取り残された寂れた商店街を何とかしようと、商店街と商工会議所の有志が中心となって、地域の埋もれた資源を活かした様々な「町おこしイベント」を実施、また、日本中の先進地を視察して、喧々諤々の議論を繰り返しながら辿りついた取り組みが、古い商店街を逆転の発想で、レトロな町、「昭和の町」として売り出すことでした。

平成13年にスタートした「昭和の町」の取り組みは、商店街が最も元気だった「昭和30年代」をキーコンセプトとして、「四つの柱」で商業と観光の一体的な振興を目指したものです。

一つ目は、「昭和の建築再生」です。

商店街の建物を調査したところ、多くの建物が昭和30年代以前に建てられたものでしたが、時代とともにアルミサッシやパラペットと呼ばれる看板が設置されていました。

外観を元の姿に戻すため、店舗の入り口アルミサッシを木製の建具に、ブリキ等に作られていたパラペットを木製の看板に架け替え、商店街の町並み景観を昭和30年代風に修景しました。

二つ目は、「一店一宝」です。

各お店のあった昭和時代のお宝を展示し、商店街を「博物館」として散策を楽しんでもらう取り組みです。

三つ目は、「一店一品」です。

各お店の昭和に相応しい自慢の一品を決めてアピールするもので、例えば、森川豊国堂の手作りの「ミルクケーキ」や肉の金岡の「おからコロッケ」などが人気です。

四つ目は、「昭和のあきんど再生」です。

昭和時代の商店街の楽しみの一つが、お店の人との何気ない会話です。訪れた人々に対して、真心のこもった接客を行い、店主との会話を楽しんでもらうものです。

豊後高田昭和の町では、この4つの基本方針に沿ってまちづくりを進めました（図4）。

その他に、日本一の駄菓子屋のおもちゃコレクター小宮裕信氏が運営する「駄菓子屋の夢博物館」や定期運航するバスとしては、日本一古い昭和32年式ボンネットバスの導入、拠点となる施設の整備などを順次行い、昭和の時代が体験できる町として復活しました。

平成13年に始まった「昭和の町」の取り組みは、折からの昭和ブームもあり、スタートから2年後には、「寂れた商店街」に年間20万人もの観光客が訪れるようになり、その後も若干の変動はあるものの順調に推移し、近年ではインバウンド客も加わり、年間40万人もが訪れる人気観光スポットとなっていました。

しかし、新型コロナウイルス感染症の影響で、令和2年以降は、団体客がいなくなるなど観光客は半減し、インバウンドのツアー客は、ゼロとなりました。

2021年に20周年の節目を迎えた「豊後高田昭和の町」は、次の20年に向けて、「原点回帰と未来進化」の融合による更なる発展を目指すため「昭和の町リ・ブランディング計画」を策定し、「Z世代」と呼ばれる若い世代の取り込みや映画会社と連携した魅力向上対策などに取り組んでいます。

3. 恋が叶う道「恋叶ロード」

本市の海岸線には、昭和の町や日本夕陽百選の真玉海岸、縁結びの神様「栗嶋社」、花とアートの岬長崎鼻など観光スポットが点在していることから、平成25年に「恋が叶う道～恋叶ロード～」と名付けるとともに、「恋人の聖地」の認定を受けるなど、積極的なPRを展開し、人気の観光スポットとなっています（図5）。

4. 同年型の保養リゾートへ「長崎鼻リゾートキャンプ場」

「恋叶ロード」の終点である長崎鼻リゾートキャンプ場は、以前は、夏休みだけ観光客が来る昔



図4 昭和の町の基本方針の例

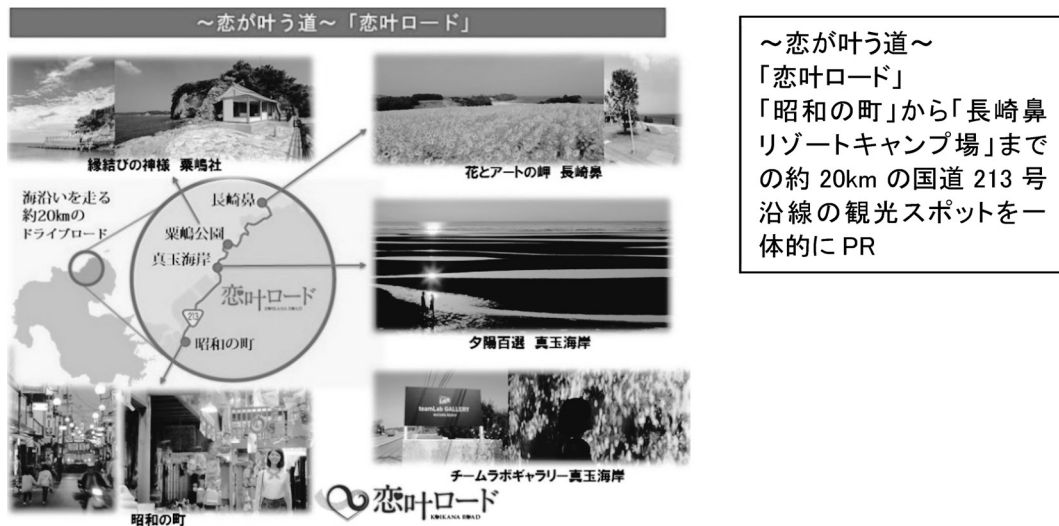


図 5 「恋叶ロード」の主要観光スポット

ながらのキャンプ場で、周囲には「葉たばこ」が広く栽培されていましたが、次第に耕作放棄地が多くなり、荒廃地が広がっていました。

この荒廃地を何とかしようと、20年程前から、地元の有志が「花の岬づくり」を始め、NPO法人の設立などを経て、岬全体に「菜の花」「ひまわり」が拡大していきました。

平成29年から、ここを舞台にして、東海大学の齊藤教授の提唱する「清潔、安全、快適」なビーチ、「パーフェクトビーチ」のコンセプトに基づくリゾートづくりに着手、清潔な環境整備の他に、非日常体験を提供するためヨーロッパ製のキャンピングトレーラーやグランピングテントを導入、その他、飲食や研修など多目的に使える海辺のテラス、サウナトレーラーなどを整備しました。

その後、全国的なキャンプブームの追い風もあり、コロナ禍においても順調に接客数、売上等を延ばしています。

5. 個性豊かな「六郷温泉」

豊後高田市には、規模は小さいですが泉質の異なる温泉が6つあることから、千年の歴史を誇る六郷満山にちなんで、「六郷温泉」と名付けPR活動に取り組んでいます。

全国的にも珍しい、2種類のかげ流しの炭酸泉が楽しめる「花いろ温泉」や高濃度の塩化物泉で人気の「海門温泉」など、個性豊かな多様な泉質と自然環境、文化などを融合させた「新たな癒しの里」を目指しています。

また、温泉が市内の数カ所に点在しているため、市内のどこに住んでいても車で10分ちょっとで温泉に入れるという恵まれた環境にあります。

6. 本気の子育て支援

豊後高田市では、平成17年の1市2町合併時から定住対策を最重点施策に位置付け、現在に至るまで、徹底した子育て支援、移住促進に取り組んできました。



図 6 豊後高田の「六郷温泉」

特に子育て支援は、全国トップレベルであり、本気の子育て支援に取り組んでいます。

具体的には、高校生までの医療費無料、0歳から中学生までの給食費無料、保育料の無料、幼稚園の授業料の無料、子育て応援誕生祝い金最大200万円など徹底した内容となっています。

■主な子育て支援制度

- ① 高校生までの医療費無料
- ② 0歳から中学生までの給食費無料
- ③ 保育園の保育料無料・幼稚園の授業料無料
- ④ 子育て応援誕生祝い金
(第1・2子10万円, 第3子50万円, 第4子100万円, 第5子以降200万円)
- ⑤ 市営の無料塾(学びの21世紀塾, 難関大学対策講座)

■その他移住支援

子育て世代の移住者に対して、約100坪の無料の分譲宅地を提供

こうした徹底した子育て支援などの定住、移住対策を実施してきた結果、過疎地域では、奇蹟ともいえる8年連続社会増を達成、生まれる子供もここ数年増えており、長い間、待機児童ゼロだった本市がついに、保育所が足りなくなる事態となり、今年、新たに保育園を整備したところです。

平成18年から令和3年までの本市への転入者の年代別、出身地別の状況を調査したところ、年代別では、30代が29%と最も多く、次いで、40代が22%となっています。

出身地では、県内が35%と最も多く、次いで、九州内が26%、そして、関東が18%となっています。

7. その他の特徴的な施策

豊後高田市では、市町合併の際の最重点施策として、「子育て・定住対策」のほか、都市部との格差是正、市内中心部と周辺部との格差是正、情報化社会への対応を目的として、市内全域に光ファイバーを敷設（幹線だけでも 600 km 以上）、しました。

市内の何処に住んでいても光ファイバー網による高速インターネット、CATV 自主放送、多チャンネル放送、データ放送、はもちろんのこと、加入者間無料電話、高齢者の安否確認、緊急通報サービスも実施しています。

この情報通信網の整備は、その後の企業誘致などにも寄与しています。